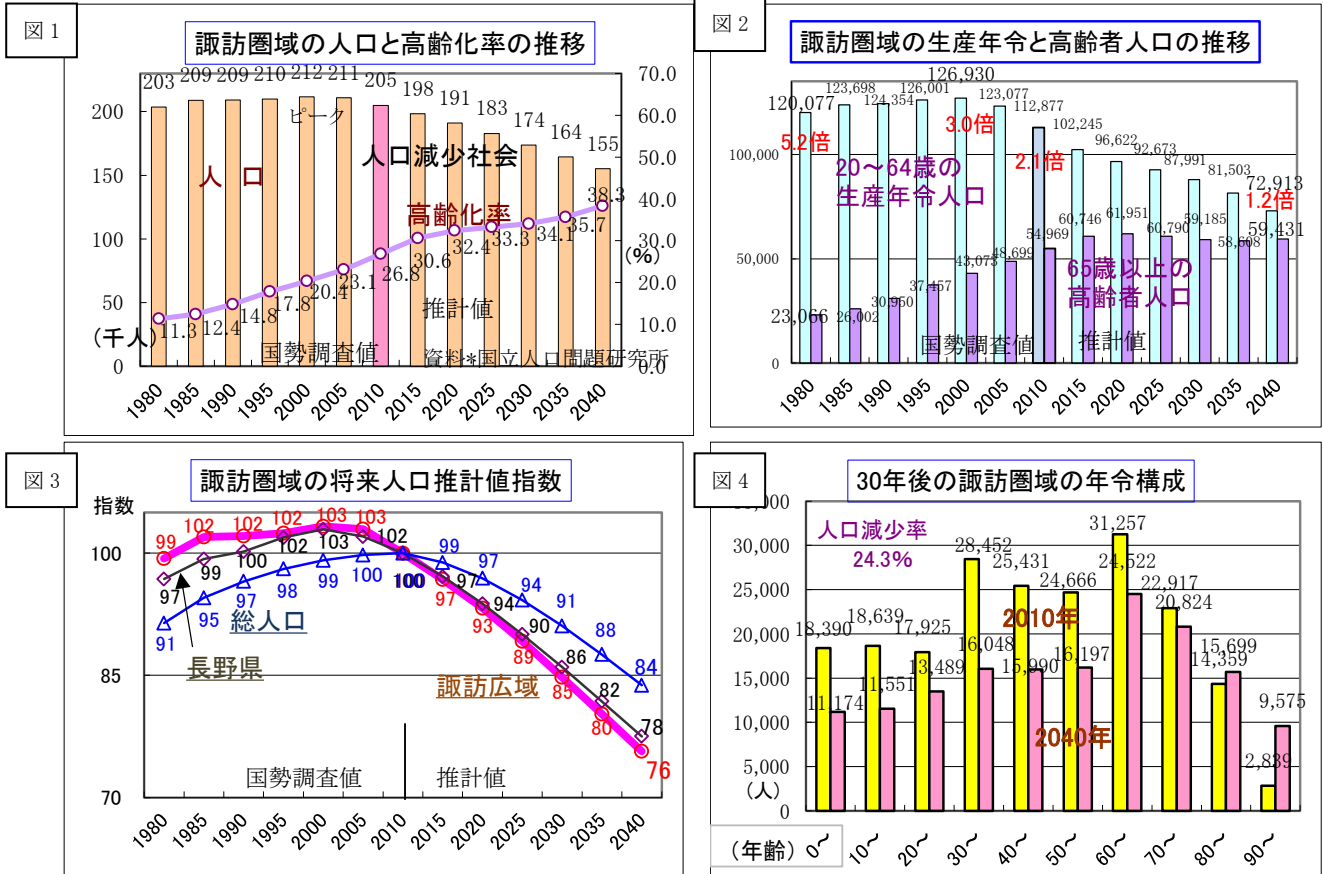


# 諏訪圏域は長野県なみの人口減少、市町村の間に大きな格差

諏訪圏域とその市町村の人口推計値の考察

25.5.11 (4.2) 矢島義恭

ここで使う推計値は、平成25年3月公表の国立社会保障・人口問題研究所による推計値



## I 人口減少と少子高齢化や生産年齢人口の減少は、総人口の動きより早く進行する

### 1 諏訪圏域では、30年後の人口が24.3%減少し、人口規模は4分の3になる

諏訪圏域の人口は2001年がピークで、しばらくはピーク時の横ばいが続いていたが、いよいよ本格的な減少期に入り、減少のスピードが早まっていく(図1)。24.3%の人口減少は全国平均の減少率16.2%を大きく上回り、長野県の減少率22.5%よりやや高い水準である(図3)。

### 2 生産年齢人口は減少速度が早く、30年後には35.5%減少して3分の2になる

教育期が終わって多くの人が就業する20歳から64歳までの生産年齢人口が激減している。2010年の生産年齢人口は11万3千人、5年前より約1万人減り、次の2015年にも約1万人減少すると推計されている(図2)。30年後には7万3千人となりそれは2010年より35.5%の減少で、3分の2の規模になると推計されている(図2)。

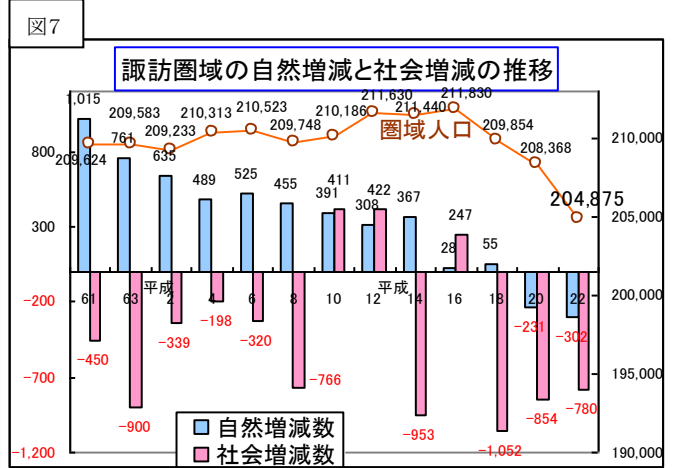
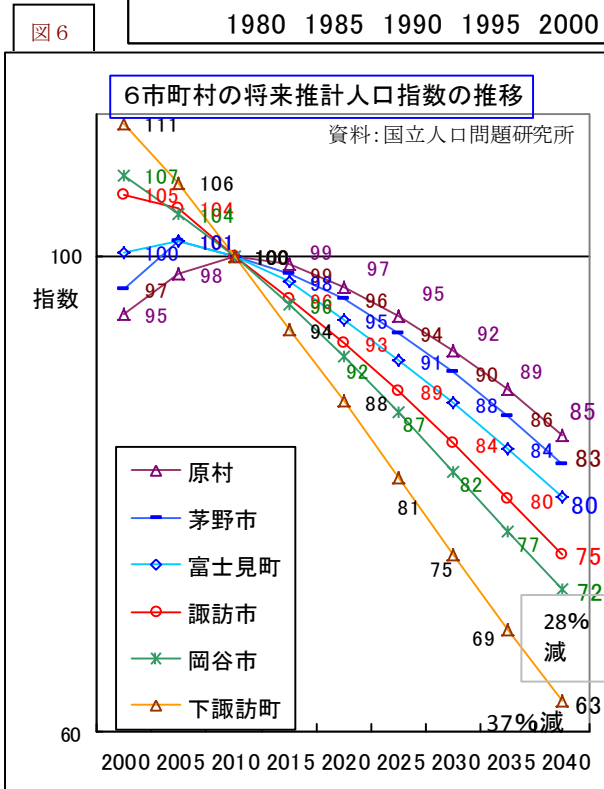
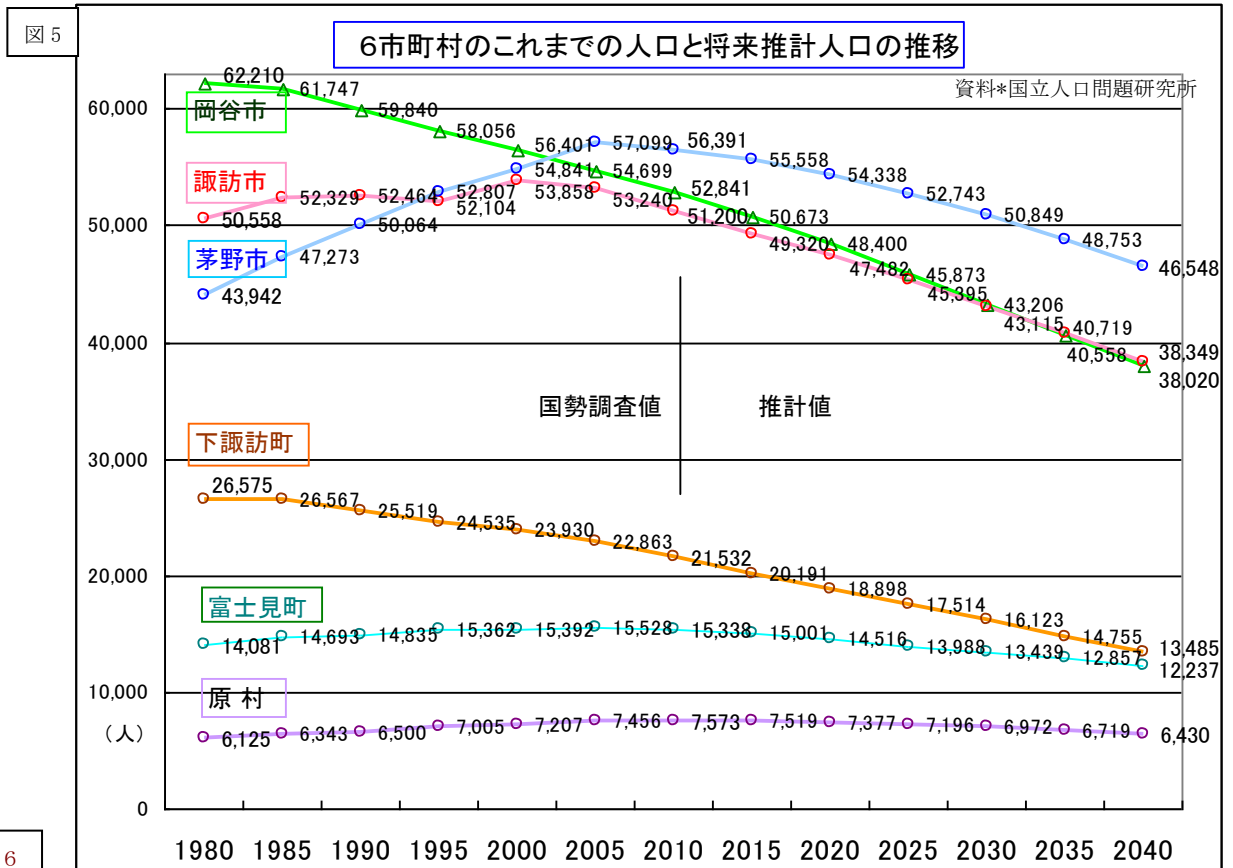
### 3 高齢者人口は増加し、30年後には高齢化率38.3%に達する

人口が減少するなかで、高齢者人口だけは増え続けたあと横ばいとなる(図2)。30年後の高齢者比率38.3%は、日本総人口の40年後の高齢者比率38.8%に匹敵する(図1)。人口減少や高齢化では全国の動きに対し諏訪圏域は10年位先行している。

### 4 高齢者人口と生産年齢人口の比が1対1に近づいていく

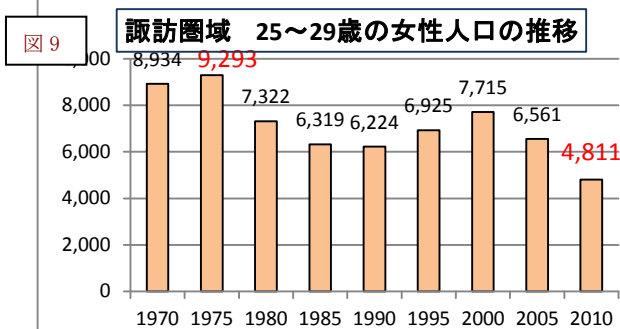
10年前の2000年には高齢者人口の約3倍あった生産年齢人口は、2010年には2.1倍となり、30年後には1.2倍に下がる(図2)。その年齢構成をみると、2010年には30代から50代の働き盛りの人口がまだ多数いて、70代以上の高齢者人口よりも多い(図2)。30年後の構成をみると、要介護者が多い80歳以上の高齢者人口は増え、それを支える30代から50代の働き盛りは激減する。産業・経済や社会の有り様、医療・介護・年金などの高齢者福祉に大きな変化が予測される。

II 6市町村は揃って人口減少し人口規模が小さくなるが、減少率には格差がある



若者の流出率と高齢化率

表8	2010年 25~29歳 人口	10~14歳 時と比較 減少率	2010年 高齢化率	2040年 高齢化率
岡谷市	2,425	25.1	28.4	38.3
下諏訪	936	27.8	32.6	43.9
諏訪市	2,768	3.6	25.2	37.6
茅野市	2,866	10.4	24.1	36.3
原村	328	30.5	26.9	40.6
富士見	756	23.5	29.9	40.9
諏訪圏域	10,080	16.5	26.8	38.3
長野県	104,461	19.8	26.5	38.4



## 1 成人した若者の大都市圏への流出が続くが、諏訪圏域内での移動も大きい

人口 20 万人規模の諏訪圏域は周囲を山地で囲まれ、圏域外隣接地域との人的交流が比較的少ない。しかし圏域内では通勤や子育て家族の住宅建設などの移動は容易のため活発である。従って、若者の域外流出率は市部で小さく町村部で大きい、それが直接人口減少率と結びつかない(表 8)

## 2 これまでは増加と減少の自治体に分かれていたが、これからは揃って減少に向かう

城下町や宿場町として栄え、明治以後は製糸業、戦後は精密工業などで栄えてきた岡谷市や下諏訪町、諏訪市の上諏訪地区などは近年激しい人口減少を続けてきた。これに対し、純農村であった八ヶ岳山麓の茅野市・原村・富士見町や、諏訪市の平坦部農業地区は宅地化と商業地の発達により著しく人口を増加させてきた。しかし 2010 年以後はおしなべて人口減少に入る。減少規模は湖周で大きく、岳麓は比較的小さい(図 5, 図 6)。

## 3 湖周で人口の減少が長期的に続いてきたが、これから更に急激に減少する

岡谷市は 1980 年の人口 62,210 人がピークでその後減少し続けてきた。30 年で約 1 万人減少して 2010 年は 52,841 人となり、30 年後には更に 38,020 人にまで減少しピーク時の約半分になると推計されている(図 5)。下諏訪町は 1970 年の人口 26,932 人がピークでその後は減少の一途で、2040 年には 13,485 人と半減する。諏訪市は横ばいであったが、上諏訪旧市街地は 1965 年に 26,826 人あった人口が 2010 年には 11,958 人にまで激減しており、旧村部の人口増により市全体として横ばいを維持してきた。しかし、30 年後には 75%に減少し 4 分の 3 の人口規模となる(図 6)。こうした推計も、旧市街地が子育て期若者によって見直され定住が増えれば変わるであろう。

## 4 南諏の岳麓市町村や諏訪市平坦部農地で人口増加が続いてきたが、減少に転ずる

純農村地区であったこの地区では、若者の移住による住宅建設やアパートの建設が進み、工場団地や新しい商業地も形成されて人口が増加し続けてきた。茅野市の 2010 年の人口は 30 年前より 12,449 人増え、原村は 1,448 人、富士見町は 1,258 人増加している(図 5)。諏訪市の旧村部は 30 年前の人口 23,091 人が 2010 年には 30,793 人へと 7,702 人増加し、小和田地区水田の宅地化・商業地化でも 3,957 人が増加している。しかし、これからは人口減少期に入り、2040 年にはこれまで急増してきた茅野市では 17%の減少が推計されている(図 6)。こうした変化の原因については別稿で考察してみたい。

## 5 人口減少の格差により、圏域内では湖周より岳麓の人口の方が多くなる

岳麓の茅野市と原村・富士見町を合わせた人口は、1980 年には 64,148 人で、湖北の岡谷市と下諏訪町の人口 88,785 人より少なかった。しかし 2040 年の推計人口は岳麓 3 市町村で 56,687 人、湖北 2 市町で 51,505 人と、湖北より岳麓の方が多くなり逆転する(図 5)。

## 6 高齢化率が高くなり、とりわけ町村自治体で高率になる

2010 年の高齢化率は 6 市町村が概ね 20%台だが、2040 年には市部の 3 市が 37%前後にまで高くなり、3 町村はいずれも 40%台の高率となる。特に下諏訪町は 43.9%と推計されている(表 7)。諏訪圏域は自然減少と社会減少が続くなかで(図 6) 全国に先駆けて高率の超高齢社会と人口減少社会に突入する。

## 7 本論者は将来推計値と原因に絞った分析であり、影響と対策の検討が今後の課題である

〔人口推計値レポート No. 1～4〕では人口減少の実態とその主要な原因を明らかにすることに考察を絞り、影響や対策に触れることは極力避けてきた。対策を考えるにはまず主要な原因を明らかにする必要があると考えるからである。総人口の減少と少子化の関係、地方から大都市圏への若者の移動と地域における人口減少の関係、地方自治体における人口減少や高齢化の構造が明らかになった。的確な対策が講じられなければ日本や地域がどうなるかが見えてきた。人口減少社会の到来という歴史的な事態を受け止め、衆知を集めてその影響や対策を考えてゆかねばならない。

Ⅲ 諏訪圏域の30年後までの「超高齢化」と「人口減少」 「人口減少超高齢化社会」

1 生産年齢人口・若年人口の激減により 急激な人口減少がすすむ

- ◇ 生産年齢人口は人口減少以上に激減 2010年 112,877人が 30年後には 72,913人へと **35%減少**
- ◇ 出生数と若年人口の減少 2010年 37,029人が 30年後には 22,725人へと **39%減少**
- ◇ 人口のピークは2008年 212,358人、2020年 **10%減** 191,011人、2040年 155,069人へ **27%減少**
- ◇ 出生率が2.07に回復しなければ、いつまでも減少し続ける (減少社会レポート No.1)
- ◇ 人口減少の原因は出生率低下の他に、出産年齢女性の減少と高卒後若者の大都市流出がある。
- ◇ 人口減少期に入っており、30年間の減少率は全国の**16%**に対し諏訪圏域は**24.3%**とかなり高率

2 生産年齢人口・若年人口が激減するなかで 高齢者人口の増加により超高齢化がすすむ

- ◇ 高齢者人口の増加、 2020年には**13%増加**し、その後は横ばい
- 特に85歳以上人口の激増** 2010年 8,237人が 30年後には 17,083人へと**2.07倍**に増加
- ◇ 要介護認定者の激増(減少社会レポート No. 2) 2010年 8,377人が 30年後 13,055人へと**1.56倍**に増加
- ◇ 高齢者比率が激増して超高齢化社会が進行 2010年 26.8%が 30年後には**高齢者比率 38.3%**に
- ◇ 高齢者人口とこれを支える生産年齢人口の比率が激変 2010年 1人:2.1人、30年後 1人:1.2人

お神輿型 → 騎馬戦型 → 肩車型

